

入選

「病気がくれた唯一の幸せ」

山梨県・山梨英和高等学校1年 梶原 由有

「おとうさん。おとうさん」

祖母が、たどたどしい口調で祖父を呼ぶ。

「ここにいるよ」

洗濯物を取り込みながら祖父が笑顔で応える。

最近、祖父母の家に行くと、こんな光景が増えた。

以前の二人の日常生活はというと……。

私が、祖父との話を楽しんでいると、祖母がすぐに話に入ってくる。

「お前は、すぐに横入りする。だまっていられないのか」

祖父は真剣に怒っているのに、祖母は悪びれずいつでも笑っていた。祖父が

「お茶」

と言えば、祖母は、すぐにお茶を入れる。湯飲み茶碗から溢れそうになるほど注いでは、祖父に叱られていた。でも祖母は、

「あら、たくさん飲ませたかったのよ」

と笑い飛ばした。祖父が風邪をひけば、祖母は薬を用意したり栄養のある物を食べさせたりと献身的に看病する。

せっかちで一本気、ちょっぴりおこりんぼうで頑固者の祖父とよく働きよく笑う、元気でおしゃべり好きな祖母—私は祖父母に対し、そんな印象を持っていた。祖母があんな病気になるまでは。

2年程前、祖母は自転車で転び手首を骨折した。治ったと思ったら、今度は高い所の荷物を取ろうとしてバランスを崩し、台から落ちた。入院こそしなかったものの大けがだった。その後、歩く動作がゆっくりになった祖母。つまりきやすくなった祖母のためにシルバーカーを買ってあげた。

「ありがとう。でもまだ大丈夫」

なんて言っていたけど、手放せなくなるのにそれほど時間はかからなかった。家族みんなは「年だから」と年齢をいい訳にしていたがそれでも転ぶことが増え、歩き方もままならなくなった祖母を病院でみてもらうことにした。そして、わかったこと。それは、祖母の病気が難病であること。特定疾患に指定され、治療法が見つからないということだった。発症率は十万人に一人。だんだん運動機能が低下して、動けなくなってしまうと母が教えてくれた。

「あんなに明るく元気で働き者のおばあちゃんが、何で」

と私は心の中で何度も叫んだ。

祖母は、自分の病気のことを知っている。悲しい顔なんて見せたことのない祖母が

「なんでこんな病気になったのかねえ」

とつらそうにつぶやく。私はなんて言葉をかけていいかわからなかった。励ます言葉が見つからなかった。

「大丈夫。おれがいるから」

と祖父。

「今まで、よく働いていたからもう休んでいいよってことだよ」

と話す祖父の顔は、とても優しかった。

洗濯。掃除。ご飯の支度。祖母の病気の進行とともに忙しくなっていく祖父の毎日。会いに行く度に、手作りの手すりが増えていた。器用な祖父が祖母のために取りつけているのだ。

「おれが病気になっていたら、お前が面倒をみってくれるんだから、同じことだよ」

と笑う祖父。数年前には想像もできなかった。

最近私が見つけたあたたかい風景がある。それは、買い物に行った時のこと。お互いの腕をしっかりと巻きつけながらゆっくりゆっくり歩いている二人の姿だ。転ばないように必死に気を遣っている祖父の横で、大好きな人と腕組みをして歩いていることが幸せでたまらない祖母。まるで 80 歳と 77 歳の恋人同士のように。病気がくれた唯一の幸せなのかもしれない。病気になって初めて知ったお互いの優しさ。

どうか一日も長く、そんな幸せな日々が続きますように。私は心からそう願っている。